

学
ぶ
育
む

亡き娘通して伝えるがん



小児がんと闘った鈴木さんの娘の実話などを題材にした副教材

がんの正しい知識などを学校で教える「がん教育」推進の動きが活発になる中、娘を小児がんで亡くした父親らのグループが、実話を題材にしたがん教育の副教材を作成し、希望する中学校などに配布している。

副教材作成の中心になったNPO法人「いのちをバトンタッチする会」(名古屋市長古屋市)代表の鈴木中人さん(58)は、1995年、6歳だった長女景子さんを小児がんで亡くした。景子さんは、3歳の時から長期の入院生活や抗がん剤

中学生向け副教材作成

治療を続け、小学校には車いすで通った。登校ができなくなってきたから、病院でノートを広げ、亡くなるまで勉強熱心だったという。

鈴木さんは、最後まで一生懸命生きた景子さんの姿を伝えようと、学校などで講演活動も続けてきた。

国は2012年度に策定した「がん対策推進基本計画」でがん教育の推進を盛り込み、文部科学省が17年度から全ての小中高校で、がん教育を実施することを求めている。

らの協力を得て今春、副教材を完成させた。

A5判16ページの副教材は、主に中学生向けで、保健体育や道徳の授業で使ってもらおう。

景子さんのほか、小学6年から中学2年まで小児がんの治療を続け、克服した女性の実話も盛り込んだ。がんの仕組みや予防法なども説明し、命の大切さが理解できる内容になっている。

これまでに愛知、岩手、山口県の中学校などに約8000部を配布した。ほかに、教員向けの指導案や動画も作成し、配布している。

「自分や友達ががんになったらどうするか、考えてほしい。命の尊さを実話を通して感じてもらいたい」と鈴木さん。

副教材などは「いのちをバトンタッチする会」が無料で配布。同会のホームページ(<http://hm7.aitai.ne.jp/~inochi-b/index.html>)からもダウンロードできる。問い合わせは、同会(052・5801・8608)へ。



鈴木中人さん

こうした動きに、鈴木さんは、「学校現場では、どのようがん教育をすればいいか戸惑う教員もいる。先生たちが使いやすい教材を作って、がんへの理解や命の教育が進めば」と、教育や医療関係者